



みどりの風

平成28年2月1日発行
校報 第527号
〔みどりの風 第70号〕
練馬区立関町北小学校

桃花片

校長 大野 泰弘

まもなく立春、暦の上では春を迎えます。学校の正門脇にある梅の花も一輪、また一輪と咲き始めています。

さて、表題の「桃花片(とうかへん)」とは、以前、6年生の国語の教科書に掲載されていた岡野 薫子さんの物語の題名です。

この「桃花片」とは釉の名称で、物語の中では、これを使った硯用の水滴(水差し)のことを指します。「その水滴の、わずかにむらさき色のかかったうす桃色の地には、くれないの小さな点が、いくつとなく、雲のようにむらがっている。それらの点は、重なったりわかれてぼかされたりしながら、丸みを帯びた水滴全体がけむったような花曇りの感じをただよわせている」と表現されるほどの類まれな名器のことです。

物語の舞台は昔の中国。陶工の父のもとに生まれ育った楊は、幼少の時から、日常生活で使われる硯箱や茶碗といった地味な焼き物ばかりを作っている父に対して、「お父さん、もっといいものが焼いてみたくないの」と言って、対立します。楊は、鑑賞に値する華やかな焼き物をつくることに情熱を傾け、そこに美の基準を置いていました。それに対し、父は楊の焼き物を見て、「何かに使うからといって、価値は下がりはない。おまえの壺は厳しすぎる。おまえのそういう、はやる気持ちが壺をそこねているのだが……。何も着せない壺は、ごまかしも何もききはしない。」と言って諭します。

その楊も、やがて時が過ぎ、稀代の名工、名人と呼ばれるようになりますが、その立場に立ってみると、自分自身の焼き物に「何かが足りない」と感じるようになり、幼いころに絵付けした素朴な飾り皿や白磁のつる首にかなうようなものをまだ創作していないような気持ちになってきたのです。

そんな折りに、近くの村に「桃花片」の釉を使った水滴が見つかったという話を耳にした楊はその水滴を見に行くことにしました。そして、その水滴を手にした瞬間、その穏やかな色、暖かな春の感じ……。楊は、この小さな一つの水滴に込められた陶工の生命、魂にふれた思いがしたのでした。自分の焼き物に足りない何かに出会ったような感動を受けた楊が、その想いの赴くままに水滴の裏を返したときに目にしたもの。そこには、楊の父親がつつましく記した刻印があったのです。

この物語の主題は、美を追究する過程において、価値のあるものとは何なのか、美しいものとは何なのか、を考えていくところにあります。そして、真に美しいものとは何か、それに対する父親と楊の価値観の違いを対比しながら、楊の父親に対する感情の変化をとらえ、学習者である子どもたちが自分の考え方や生き方を見つめ直してみる、そのような学習ができる物語です。

主人公の楊は、桃花片に記された父の刻印を見たとき、あらためて父の偉大さを悟ったことでしょう。それは、自らの信念や情熱を傾けながらも、自分に足りない何かを感じることができたから、また、現状にとどまらずに向上していこうとする一歩を踏み出したからこそたどり着いた出会いなのだろうと思います。

私は、この主人公の楊のように、心のうちに「まだ何かが足りない」という思いをもって、向上に努めていく、それが常に必要であると思っています。「桃花片」の水滴のように、その存在自体が見る人、使う人の心を和ませ、それを創りあげた陶工の心の温かさが感じられる、そのような学校をめざしていきたいと考えています。そのためには、「桃花片」のような教育実践を求め、より多くの意見や考えに耳を傾けていかなければなりません。学校内でも、練馬区で4月から導入される「新たな三学期制」に向けた議論を重ねながら、来年度の教育課程を編成しておりますが、引き続き保護者や地域の皆様との対話を続けていきたいと思っています。それが、子どもたちのためによりよい学校をつくることになるからです。

これからの季節は梅の花が主役ですが、可憐に咲く梅の花を見ると、この「桃花片」の話を思い出します。そして、楊のような陶工ではありませんが、「まだまだ何かが足りない」と自省することが大切であると思っています。